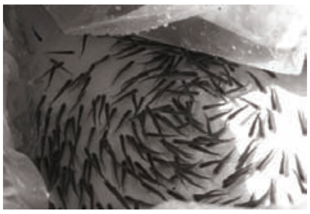
尻別川の未来を考える
オビラメの会
OBIRAME RESTORATION GROUP NEWSLETTER 29 Nov.07

報告　玉井秀樹
パタゴニア日本支社、
オビラメの会会員

稚魚1000匹を放流 倶登山川支流へ



9月24日、祝日の朝10時。青空の広がる倶知安町の富士見橋に、尻別イトウの遺伝子を引き継ぐ0歳の稚魚を放流するため、長靴を履いた子どもと大人が約30名集まりました。涼やかな秋風に吹かれる参加者の表情からは、こころなしかワクワク感が漂って来ます。

草島清作会長の挨拶に続いて、参加者全員が簡単な自己紹介を行ない、放流場所である倶登山川支流へ向かうマイクロバスに乗り込みました。現地ではすでに、モニタリングチームの大光明会員が待機していて、青い大きなプラスチック・ボックスに、イトウの稚魚が入ったビニール袋が見えます。用意されたちょうど1000尾の稚魚たちは、標識代わりに手作業でアブラビレをカットされていて、大光明さんが小さな網で優しくすくってバケツに移し、流れに立つ子どもたちへと手渡されました。子どもたちはしげしげとバケツの中を覗き込み、思い思いに声を上げました。彼らの目に、イトウの稚魚はどのように映ったのでしょう。

尻別川の過去と現在、そして未来をつなぐイトウ。尻別川の豊かさをその存在が物語る貴重な魚。しかし、このバケツの中の生き物は小指ほどの長さのサイズからしても、絶滅寸前のイメージどおりあまりにも頼りなく見えます。その動きも、見ている者を不安にさせるほどへろへろした泳ぎです。これで本当に厳しい自然の中を生き抜いていけるのでしょうか。放流後あっという間に、野鳥や大きな魚に食べられてしまうのではなかろうかと、誰もが心配です。しかし、何とか生き抜いた稚魚たちが、やがて彼らの父である「チビ」と母「ノリカ」のように90cmほどの、いえもっと大きな魚に成長してくれることを祈るしかありません。

緩やかな流れの中で子どもたちがゆっくりバケツを傾けると、こぼれ出る流れに逆らうように、稚魚たちはバケツの底に頭を向け、必死に尾ビレを振っています。しかし最後には水面へと流れ落ち川の水に体を包まれると、浅い底で定位しました。長靴のそばで、流されまいとひたむきに尾を振る稚魚たち。子どもたちは自分が放流したイトウを指さして歓声を上げ、そして飽くことなく見つめ続けました。続いて大人たちも放流を行ない、子どもたち以上に、自分が放流したイトウの稚魚を見つめ続けている姿がとても印象的でした。

稚魚がやがて成魚になったとき、本流から産卵のためにここへ帰って来れるよう、途中にある河川構造物の効果的な改修が期待されます。かつての豊かな尻別川を取り戻すためには、行政や地域住民、釣り人といったさまざまな立場の人の協働が欠かせません。この復元作業はその誰にとっても初めての取り組みであるため、前進するためには困難や戸惑いが付きまとうこともあるでしょう。しかし、この稚魚たちが生き延びていくことに比べると、我々の困難はそれほどたいしたことではないのかもしれません。

写真　玉井秀樹（上、中段）
鈴木芳房（下段）

放流魚たちのプロフィール

父　チビ（尾叉長87.5cm、体重7.70kg）
1998年9月13日、尻別川で捕獲。
母　ノリカ（尾叉長89.0cm、体重8.06kg）
2000年11月4日、尻別川で捕獲。

採卵日	2007年5月20日（3200粒）
孵化日	2007年6月26日ごろ（2800匹）
放流時の体長	約3cm
この日の放流数	1000匹（すべてアブラビレ切除）

INDEX

2007通常総会報告
オビラメ植樹会
淡水魚保護Fに参加
別海イトウFに参加
倶登山落差工報告
清掃会リポート
放流魚追跡調査報告
日野GF助成決定
札幌シンポご案内

29

通常総会報告

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は6月 24 日、2007 年度通常総会をニセコ町民センターで開き、新年度事業計画と予算を決定しました。主な決定事項は以下の通りです。

2006 年度決算	項目	金額（円）
収入の部	前期繰り越し	2,289,329
	会費収入	151,820
	助成・寄付金	1,788,726
	利息	614
	合計	4,230,489
支出の部	一般会計	844,350
	飼育・モニタリング	812,007
	雑損	51,430
	繰り越し	2,522,702
	合計	4,230,489

2007 年度予算	費目	金額（円）
収入の部	前期繰越金	2,522,702
	助成金	1,100,000
	会費	160,000
	合計	3,782,702
支出の部	事業費Ａ	2,000,000
	事業費Ｂ（地球環境基金分）	1,100,000
	会議費	320,000
	通信費・広報費	150,000
	事務費	20,000
	予備費	192,702
	次期繰越金	-
	合計	3,782,702

2007 年度の事業計画

飼育関係	新しい親魚飼育池の確保手続き
	飼育管理（稚魚、親魚）
	小学校への孵化稚魚飼育委託
	ノリカベビー放流計画策定
	えさとり
	飼育池大掃除
	飼育管理体制の練り直し
倶登山川関係	放流稚魚モニタリング
	魚道検討会（後志支庁）での検討
	落差工工事モニタリング
	レスキューカード配布
復元事業	植林会、清掃会
オビラメ勉強会	勉強会（３～４回）
	札幌ミニシンポ
ネットワーク	道工大などとの交流
	イトウ保護フォーラム in 風蓮川
サポーター拡大	助成金対策
	ＮＰＯ法人化検討
広報	ニューズレター発行（３～４回）
	ウェブサイト更新

役員会　　＊は新任

会長	草島清作	
副会長	吉岡俊彦	事務局長兼任
事務局次長	鈴木則行	
理事	山本　契	
理事	藤盛　聡	
理事	鈴木芳房	
理事	玉井秀樹	
理事	沼田雄一＊	
理事	浪坂洋一＊	
会計	阿部英治	
幹事	河野裕司	調査・研究
幹事	城座研一	調査・研究
幹事	平田剛士	広報・宣伝
会計監査	加藤清三	
会計監査	山本契	理事兼任

尻別川流域に苗木を植樹しました

通常総会に先だつ6月 24 日午後、ニセコ町内の尻別川水系真狩川そばで、植樹会を開きました。この日は会員ら 11 人が集合し、バスで会場に移動。同町内の有限会社川原種苗様（☎0136・44・3259）に提供いただいた針葉樹の種苗約300本を植え付けました。

この植樹会は、地球環境基金の助成によって実現しました。

photo / Tsuyoshi Hirata

尻別川における イトウの生息状況 と保護

平田剛士
フリーランス記者、オビラメの会会員

2007 年度魚類学会公開市民講座／北海道淡水魚保護フォーラム No. 8 In 札幌「川の自然生態系と在来魚を守る——知床を含む北海道の現状と将来——」(2007 年 10 月 8 日、北海道大学国際交流会館、日本魚類学会／北海道淡水魚保護ネットワーク主催) での講演要旨を再録しています。

会場ロビーでオビラメの会の展示に見入る参加者たち

北海道後志地方を流れる尻別川 (流域面積約 1640 平方 km) は、日本最大のサケ科魚類イトウ (Hucho perryi) 野生個体群の生息南限とされる。古くからイトウ釣りのメッカとして知られ、体長 1 mを超えるような大物が、あまたの釣り人たちを魅了し続けてきた。年配の釣り師の中には「メータークラスを年に 100 本以上、30 年にわたって釣り続けてきた」と豪語する名人もおり、この間、イトウ個体群は非常に健康な状態で維持されていたと考えられる。

ところが 1980 年代以降、イトウはめっきり釣り人の針に掛からなくなる。この時期、おもに河川改修や河畔での農地開発にともない、尻別川の自然環境は急速に悪化していた。あの美しかった尻別川がこのまま失われてしまうのではないかと危機感を抱いた地元の釣り人たちは 1996 年、魚類研究者らとともにNGO「尻別川の未来を考えるオビラメの会」を設立。2001 年にはイトウの尻別川個体群 (＝オビラメ) 復元を目標に掲げる「オビラメ復活 30 年計画」を立案し、具体的な対策に乗り出している。

第 1 は、尻別川におけるイトウ個体群の絶滅要因を特定すること。研究者の協力を得て、尻別川流域全体を対象にしたセンサスが行なわれた。その結果、流域内にイトウ繁殖の痕跡はほとんど発見されず、「個体群としてはすでに崩壊状態」という現状が確認された。捕獲禁止などの消極的な保護措置では、もはや個体群回復は難しいということが判明した。

そこで第 2 に、個体群復元のために「再導入法」というより積極的な手段が選択された。尻別川で捕獲した親魚を畜養し、人工採卵・授精によって得たストックをもとに、人工的に放流する魚たちを呼び水にして個体群を再生する試みである。再導入は国際自然保護連合や日本魚類学会が定めるガイドラインに準じて慎重に進められ、2004 年に初めて標識魚を放流。現在もその追跡調査と、調査結果に基づく再導入手法の改訂が続いている。

上述のガイドラインも指摘するように、再導入の前提として、絶滅要因の排除は絶対に欠かせない。最初の再導入エリアは、綿密な踏査に基づいて流域内で最もイトウ繁殖に適していると考えられる環境が選ばれたが、それでも 5 基の落差工による河川分断という大きな障害を抱えていた。そこで第 3 に、河川事業者 (行政機関) との協働体制による落差工改修 (魚道整備) が進められることになった。また、改正河川法に基づく新たな河川整備計画づくりに地域NGOとして参画し、イトウ尻別川個体群の保全・復元を今後の河川整備計画に盛り込むことを提案している。

尻別川における野生イトウ個体群の保全はいまだ道半ばだが、地元NGOと研究者、サポーター、そして行政機関による協働が実を結べば、かつてのように健康なイトウ個体群が泳ぎ回る尻別川が復活するかもしれない。その姿を見届けたら会員たちはグループを解散し、再び尻別川でイトウ釣りを心ゆくまで楽しみたいと夢見ている。

北海道イトウ保護フォーラムに参加しました

道東のイトウを守る会／イトウ保護連絡協議会主催の「北海道イトウ保護フォーラム 2007 in 別海」が 10 月 20 日、別海町マルチメディアセンターで開かれ、オビラメの会からも 10 人あまりの会員が参加しました。地元のイトウ保護をテーマにしたフォーラムでは、当会の川村洋司会員 (北海道立水産孵化場主任研究員) が「風蓮川のイトウの現状と課題」と題して基調講演。筆者 (平田) も話題提供しました。翌 21 日はイトウ保護連絡協議会総会の後、陸上自衛隊矢臼別演習場内の別寒辺牛川支流トライベツ川のスリットダムを見学 (写真)。盛りだくさんの 1 泊 2 日旅行となりました。(文と写真・平田剛士)

当会会員でイトウ保護連絡協議会 (11 団体加盟) のメーリングリストに加入ご希望の方は、電子メール PXN04427@nifty.com までお申し込み下さい。

倶登山川落差工改修に向けて

魚道整備環境配慮検討会経過報告

倶登山川1号落差工の前で、イトウのための改修方法について知恵を絞るオビラメの会会員たち（2007年9月）

「オビラメの会」がイトウ再導入実験を進めている尻別川水系倶登山川（倶知安町）の落差工の改修法を話し合う「魚道整備環境配慮検討会」（会長＝後志支庁産業振興部長）は、５月の初会合に続き、６月11日に第２回、７月13日に第３回会合を開きました。対象となる計５基の落差工のうち、今年度は、倶登山川とポンクトサン川（倶登山川支流）の合流点にほど近い第１号落差工（農業施設）の改修工事を目指していますが、会合では、後志支庁が用意した改修プランをたたき台に、熱心な議論が交わされています。

オビラメの会にとって、行政機関とのこのように本格的な「協働」は初めて。会員有志で対案を練りながら、検討会に要望や意見を伝えていますが、意思疎通の難しさを痛感する場面も少なくありません。合意形成を目指して、吉岡俊彦事務局長らが非公式に支庁担当者らと数度にわたって意見交換するなど、イトウ繁殖拠点の再生に向けて、全力を尽くしています。次回検討会は11月26日、後志支庁庁舎内で開催される予定です。（文と写真、平田剛士）

あくしょん りぽーと　清掃会＆越冬用エサ採り会

オビラメの会は11月10日、尻別川水系倶登山川の河畔で清掃会を開きました。

午前10時過ぎ、ニセコ町役場前に集合した一行はマイクロバスで倶知安町郊外を流れる倶登山川に移動。ここは、当会がこれまで人工孵化稚魚を放流してきた地点の数km下流にあたり、両岸に河畔林が発達するなど、２〜３歳のイトウにとって過ごしやすい環境が残されています。

しかし、一行が葉の落ちた林内に一歩踏み込んでみると、川に架かる橋の上から捨てられたと思しき空き缶やペットボトルが、次から次へと見つかり始めました。川にゴミを捨てる人の無神経さに憤りつつ、橋の周辺を一通り拾い集めた結果、大判のゴミ袋に10杯分にもなりました。空き缶やペットボトルは分別後、適正に処分しました。

引き続き、飼育中のイトウ親魚が無事に越冬できるように、餌となるウグイ採りを別の川で実施。ウグイたちが冬ごもりのために大きな群れを形成しだしているポイントに入りました。魚捕りの腕に覚えのあるメンバーばかりとあって、この日は約50kgのウグイを生け捕りにし、倶知安町内のイトウ飼育池に運び込みました。吉岡俊彦事務局長は「イトウは秋に荒食いをするといわれているので、例年通り、雪が降るまでに計400kgのウグイを与えようと思っています。元気に冬を越して、来春もきっと卵を抱いてくれると期待しています」と話しています。

たくさんのゴミを回収し

放流イトウモニタリング報告

酪農学園大学、オビラメの会会員　大光明宏武

今年7月、9月に放流イトウの追跡調査を行ないました。これまでの経過を交えて結果を報告します。

放流したイトウは、尾叉長30cmを超えたあたりから順に当該放流河川を出て行くようで、捕獲数は徐々に減ってきています。今年9月の調査で放流河川内で捕獲できたのは27〜31cmの大きさで、計3尾でした。

今年7月の調査では、初めて倶登山川の本流においても、電気ショッカーと投網を用いて放流河川と同様の手法で捕獲調査を行ないましたが、結果は0尾。しかし、調査を手伝ってもらった学生に釣りをしてもらったところ、倶登山川とポンクトサン川の合流点から200mほど下流で、尾叉長32cmの春放流イトウ（2005年6月25日放流）が釣れました。このポイントは川幅5m、水深180cmで、河畔にはヤナギが密生していて、かつ、河岸から2m近く水面にせり出しており、当該放流河川では見られない環境です。このくらいのサイズになると、放流河川の餌資源量と生息環境に満足いかなくなってきたために、流下して倶登山川本流に移動しているのだと思います。

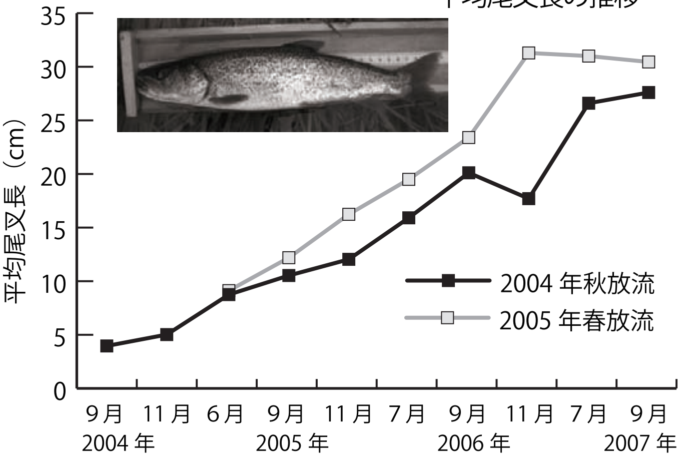
捕獲した全てのイトウは、ケガをさせないように麻酔で眠らせてから、各種の測定をしています（グラフ1）。2006年11月以降では、尾叉長平均が30cm前後になってから横ばいとなり、一見すると成長していないように見受けられますが、成長のいい個体から順に流下（倶登山川本流への移動）を始めており、成長の遅い個体ばかりが放流河川に残って捕獲されたので、このような結果になったのではないかと考えています。

捕獲数についても、今年の調査では秋放流（2004年9月25日放流）・春放流の個体ともに1〜2尾ずつとなり、前年と比べても減っていることが分かります（グラフ2）。

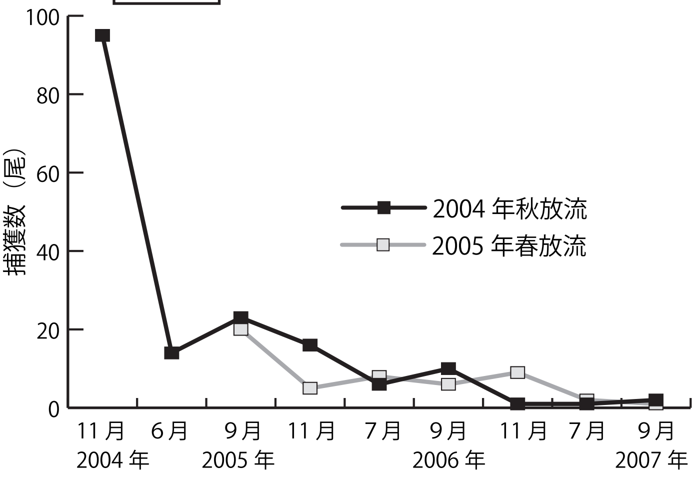
クトサン川水系で魚食性のある魚類はアメマス、ヤマメ、ハナカジカ、ウグイ、ニジマス等が確認されていますが、体長20cm前後に成長したイトウは、アオサギなど陸・空の捕食者から捕食される以外、水中の他の捕食者から捕食される可能性は高くないと考えられるため、2006年9月の時点で生き残っている個体のその後の生存率は、ある程度高いと考えられ、現時点では秋・春放流共に成功といえるのではないでしょうか。あとは秋・春個体のどちらが放流河川への回帰率が高いのか、またはどちらも変わらないのかが気になるところです。

今後はこれまでの継続と、今年9月24日に放流した「第2群イトウ」のモニタリングもあわせて行なっていく予定です。

グラフ1　放流河川内で捕獲したイトウたちの平均尾叉長の推移



グラフ2　放流河川内でのイトウ捕獲数の推移



日野自動車グリーンファンドが当会支援を決定

（財）日野自動車グリーンファンド（東京都日野市、蛇川忠暉理事長）は10月、平成19年度（11月〜翌年10月）の助成事業選考委員会を開き、オビラメの会から申請を受けていた「絶滅危惧種イトウ尻別川個体群の再導入事業」に対して、総額90万円を助成することを決定しました。同ファンドは〈「社会環境との調和」を基本理念として、1991年に日野自動車株式会社の出資により設立されました。「地球規模で考え、行動は足元から」をモットーに、様々な環境緑化、自然保護に関わる事業の実践、助成を行なっています〉（同ファンドサイトより）。

財団法人日野自動車グリーンファンドの公式ウェブサイトから。
http://www.hino.co.jp/j/brand/environment/greenfund/index.html

オビラメの会　草島清作会長の話

当会は「オビラメ復活30年計画」(2001年策定）という長期プランに基づいてイトウの再導入を進めていますが、達成までの道のりはまだ遠く、特に財政面の不安は尽きませんが、今回、(財）日野自動車グリーンファンド様にこのように手厚いご支援をいただけることになり、大変ありがたく、心より感謝申し上げます。ご期待を裏切らないよう、いっそう活動に邁進していく所存であります。

草島清作
オビラメの会会長

オビラメ さっぽろ ミニ シンポ

年末恒例の札幌シンポ。オビラメの会の今年の活動を振り返りながら、課題を話し合います。お誘い合わせのうえ、お気軽にご参加下さい。

主催	尻別川の未来を考えるオビラメの会
日時	2007年12月7日　午後6時半〜8時半
会場	北海道環境サポートセンター 札幌南口前、北４西４の１、伊藤・加藤ビル４階
入場料	無料
お申し込み	不要です。直接会場にお越し下さい。
お問い合わせ	オビラメの会事務局　☎0136-44-2472（吉岡俊彦） 電子メール PXN04427@nifty.com

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えてお振り込み下さい（手数料はご負担願います）。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末（５月）までです。おおむねひと月以内にニューズレターをお届けします。

■年会費2,000円
■郵便振替
02720-9-11016
■加入者名
「オビラメの会」

標識オビラメ見つけたら
☎0136-44-2472
オビラメ事務局マデ

ご支援
ありがとうございます

尻別川の未来を考えるオビラメの会は、会員のみなさまよりの会費と、寄付金、および地球環境基金、パタゴニア日本支社の助成金を受けて活動しています。

地球環境基金
patagonia
committed to the core

オビラメの会ニューズレター 第29号（2007年11月発行）
OBIRAME Newsletter No.29 November 2007
■発行■　尻別川の未来を考えるオビラメの会
■編集■　平田剛士
■印刷■　(株)須田製版　（北海道滝川市栄町4-4-1）
■発送■　吉岡俊彦
■郵便振替■　02720-9-11016　加入者名「オビラメの会」
■オビラメの会事務局■
北海道虻田郡ニセコ町富士見65「ライズ」内
吉岡俊彦方　〒048-1501　TEL/FAX 0136-44-2472

copyright 2001-2007 Obirame Restoration Group

http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html

水と空気、みどりの大自然
ニセコが好きだ
楽しんだあとは川を語ろう
御食事処・酒房
ライズ
ニセコ町富士見65　TEL/FAX 44-2472
Email / itou110@estate.ocn.ne.jp